

## 劇団カミヒトエ 朗読劇「いつか来た道」

通常は「舞台劇」を上演している劇団との事。劇団の歴史13年、働きながら、家庭を持ちながらの「劇団」活動は現在の時代、なかなか難しいとの事。昨年5月、4年半ぶりに活動再開。「朗読劇」は初めて。「仕込み」が楽だったと、それは確かだろう。

小4から小6の頃、交わっていた男女生徒の5人。1人の入院見舞いで26～7年ぶりに再会。5人の当時と、現在の会話で構成。

出演者5人、「舞台」前面に並べた5つの椅子に座る。観客と向き合って語っていく。その間、互いは、それほど見会わない。

「朗読劇」と称すると、自分の「語る」番が終わると「舞台」から引っ込み、また出てくるパターンの上演が非常に多い。私は「朗読劇」を舞台上演する場合、出番の終始での「舞台」出入りは「不可解」と思っているのが、好意を持って観ることができた。

とある田舎町の駅。待ち合わせた男女4人。四十路を目前に控えた彼等の目的は、入院見舞いと、幼き日に隠し収めた「タイムカプセル」を見つけ出して、皆で開け当時を分かち合うこと。

「小学校時代」を顧みる、「タイムカプセル」。それほど目新しい「設定」ではない。ただ、彼等が同じ年齢ではないのがミソか。

となると彼等には何らか別の繋がりがありそうだ。男の子と女の子、「家庭」環境の異なり。地域のしがらみは「小学生」仲間と言えども、まつわりついてくる。そして、「田舎町」では「中学校」進学でも、「町」を出ていく場合も出てくる。なかなか5人の関係は複雑だ。「場」の設定は考えられている。

5人の出演者。各々に、語り、会話を交わす表情や喋り方が豊かだ。これは、相手を周囲に、目の前に想像する「舞台劇」を設定しているようだ。それだけに、出演者たちの「演技力」が必要。

「舞台劇」では、自分の動作・台詞を相手役が受けて、反応する姿態・喋り方に対して、自分の「表現」を創るのだが、「此処」では、自身で想像し創造しなければならない。これは、別の意味で難しい。それらを「出演者」たちは、意識して演じているように感じた。その意味で、観客にも、様々な「想い」を生み出させることが出来たように思える。「朗読劇」に違いに感情を持ち込めた。

ただ、「タイムカプセル」の紛失が、入院している彼女が取り出していた。「自分」以外のものは開けていない、とのこと。これが何を意味し、何が言いたいのか。さほど、結びの「ピッタリ」、にはならない。ここに、もうひと工夫が必要に思える。

今泉おさむ（日本演出者協会 関西役員／枚方演劇連絡会 会長）